ゾンバルトと日本
——ゾンバルトとその周辺の人々——

池田浩太郎

はじめに
第1節　ゾンバルトの業績の邦訳書
　1.　社会主義に関する研究の系列
　2.　資本主義に関する研究の系列
　3.　経済学，社会学などに関する研究の系列
　4.　20世紀ドイツ社会・経済学の三巨星の業績の邦訳書について
第2節　1920年代のゾンバルトと日本の社会・経済学界
　1.　日本人ゾンバルト・ゼミナリストの誕生
　2.　ゾンバルトの日本人留学者への個人教授
　3.　ゾンバルトの蔵書の日本の大学への売却

はじめに

ドイツ新歴史派経済学の最後の巨匠ヴェルナー・ゾンバルト Werner Sombart, 1863–1941 の，20世紀日本の社会・経済学者たちや社会・経済学界にあたえた影響。この様相について，私なりのやり方で，個別的に，やや具体的に見てゆくことが，本稿の目的である。

したがって，かつて私が述べたように[1]，本稿は研究論文というよりは，多分に私的趣味的要素をもつ，私のゾンバルト研究への準備的な備忘メモ，といった程度のものに終始せざるをえないであろう。このことを，予めおゆるしいただきたい。

1)　拙稿「アードルフ・ワーグナーとヴェルナー・ゾンバルト——ゾンバルトとその周辺の人々——」成城大学「経済研究」第150号，平成12年11月，2ページ。

本稿ではまず，ゾンバルトの学問的諸業績の邦訳について概観してみる。これはいわば，ゾンバルトの学問が，20世紀日本の社会・経済学界にあたえた影響の様相や大きさをはかる，一つの一般的指標となりうる，とも考えられるからである。

次いでは，やや具体的に，第1次世界大戦敗北後のドイツの政治的・社会的・経済的大混乱期である1920年代において，ベルリン大学経済学正教授であったゾンバルトがおこなった，

日本人研究者へのゾンバルト・ゼミナール出席の承認

日本人の留学者への個人教授 Privatstunde の実施

ゾンバルトの蔵書の日本の大学への売却

などの個別的・具体的事項について，それぞれ簡単にふれる。

そしてこれらを通して，ゾンバルトの20世紀の日本の社会・経済学者や社会・経済学界にあたえた影響の様相を，さぐる手がかりとしたい。同時にこれらによって，逆にゾンバルトの学問的業績と人物への，一層深い理解に資したいとも思っている。

第1節　ゾンバルトの業績の邦訳書

ドイツ新歴史派経済学の新世代を代表する学者であり，20世紀を代表する，数少ないドイツ社会・経済学者の一人でもあるヴェルナー・ゾンバルト。彼の学問的業績の邦訳について，その存在を網羅的にとはいえないが，手許にある邦訳単行書を中心に，ごく大雑把にしらべてみよう。彼の業績の邦訳には，大学の紀要といった雑誌などに掲載されたものも少なくない。しかし本稿では，これらについてはとりあげないことにしたい。

個々の業績の系列所属の具体的決定にあたっては，異論の生ずる余地もあろう。しかし，ここでは邦訳書の存在するゾンバルトの著作や論文などを，彼の生涯に亘る研究の三つの領域にしたがって，便宜的に次の三系列のものに分類して示そう。すなわち，

1. 社会主義に関する研究の系列
2. 資本主義に関する研究の系列
3. 経済学，社会学などに関する研究の系列

そして，これらのものを，系列毎に，それぞれ原業績の公表年次にしたがって並べてみよう。

1. 社会主義に関する研究の系列

Sozialismus und soziale Bewegung im 19. Jahrhundert, Jena 1896.

神戸正雄著『社会主義及社会的運動』廣文堂書店，1915年。

ただし，原著にある「前書き」と付録「1750–1896年の社会運動年表」は完全省略。タイトルページおよび各章はじめのモットー（学芸史上の有名人物の言葉からの引用）も省略。センテンス単位の省略や相当程度の意訳部分もある。

しかもこの邦訳は，すでにこれより以前，同一訳者による雑誌上での邦訳の公表の形で，なされている由である。

すでにタイトルから「19世紀における」im 19. Jahrhundert の部分の消えている，この著作の改訂第8版，1919年の全訳には，次のものがある。

林要訳・再版普及版『社会主義及び社会運動』同人社，1928年。

さらに，これ以前の1923年には，「社会主義文献指針」と「1750–1914年の社会運動年表」の二つの付録を省いた，池田龍蔵訳『社会主義及び社会運動』が三田書房より公刊されたようであるが，筆者の手許にはない。

原著の全面的改訂第10版，1924年は，次のような別のタイトルの大著作となった。

Der proletarische Sozialismus (“Marxismus”), Zehnte neugearbeitete

Auflage der Schrift “Sozialismus und soziale Bewegung”, 2 Bde., Jena 1924.
田辺忠男訳『プロレタリア的社会主義』日本評論社，1932年。

訳書は原著の第1巻，学説（本文477ページ）の内，最初から174ページまでの邦訳である。

“Dennoch” ! Aus Theorie und Geschichte der gewerkschaftlichen Arbeiterbewegung, Jena 1900.
森戸辰男訳『労働組合運動の理論と歴史』同人社，1922年。

Die gewerbliche Arbeiterfrage, Leipzig 1904.
鈴木豐訳『労働問題と労働政策』有斐閣，1919年。

Das Proletariat. Bilder und Studien, Frankfurt am Main 1906.
「無産階級論」河田嗣郎著『社会問題及社会運動』岩波書店，1919年，付録第1。

原著本文88ページの内より，その1/5程度の部分を著者が順次抄訳，まとめたもの。

Warum gibt es in den Vereinigten Staaten keinen Sozialismus ?, Tübingen 1906.
「何故亜米利加に社会主義なき乎」河田嗣郎，前掲書，付録第2。

原著の「前書き」，本文の「第2編第1章」を省き，原著本文142ページ中，上記以外の箇所から順次1/2程度を拾いだし，抄訳，意訳してまとめたもの。

Karl Marx und die soziale Wissenschaft, Archiv für Sozialwissenschaft

und Sozialpolitik, Band 26, 1908.
知念英行編訳『マルクスと社会科学』新評論，1976年。

訳書のタイトルとなった1908年の上掲論文のほか，論文「カール・マルクスの経済学体系〔の批判のために〕」1894年 Zur Kritik des ökonomischen Systems von Karl Marx, Archiv für soziale Gesetzgebung und Statistik, Band VII, 1894. および報告「理解〔—社会学の基礎概念〕」1929年 Das Verstehen, in : Verhandlungen des Sechsten Deutschen Soziologentages vom 17. bis 19. September 1928 in Zürich, 1929. を訳出。

Deutscher Sozialismus, Berlin-Charlottenburg 1934.
難波田春夫『独逸社会主義』三省堂，1936年。

2. 資本主義に関する研究の系列

Die Juden und das Wirtschaftsleben, Leipzig 1911.
金森誠也監修と訳『ユダヤ人と経済生活』荒地出版社，1994年。

なお古くは長野敏一訳『ユダヤ人と資本主義』国際日本協会，1943年もある。これは（本文476ページの）原著の最初から（180ページまでの）4割弱を邦訳。不注意によると思われる不適切訳，ないしはミスも若干見られる。

Studien zur Entwicklungsgeschichte des modernen Kapitalismus, Erster Band, Luxus und Kapitalismus, München und Leipzig 1913.
金森誠也訳『恋愛と贅沢と資本主義』論創社，1987年。

原著第2版，1922年に拠った Liebe, Luxus und Kapitalismus. Über die Entstehung der modernen Welt aus dem Geist der Verschwendung, Berlin 1986. にもとづく邦訳であろうか。古くは田中九一訳『奢侈と

資本主義』而立社，1925年もある。

また金森訳は，2000年には同じ題名で講談社学術文庫の一冊として，再刊されている。

Zweiter Band, Krieg und Kapitalismus, München und Leipzig 1913.
金森誠也訳『戦争と資本主義』論創社，1996年。
古くは立野保男訳述『戦争と資本主義』大同書院，1938年，もある。

Der Bourgeois. Zur Geistesgeschichte des modernen Wirtschaftsmenschen, München und Leipzig 1913.
金森誠也訳『ブルジョワ，近代経済人の精神史』中央公論社，1990年。「著者名索引」を除いた全訳。

Der moderne Kapitalismus, Historisch–systematische Darstellung des gesamteuropäischen Wirtschaftslebens von seinen Anfängen bis zur Gegenwart, 3 Bde., München und Leipzig 1916 und 1927.
Erster Band, Einleitung–Die vorkapitalistische Wirtschaft–Die historischen Grundlagen des modernen Kapitalismus, 2. Aufl., 1916.
岡崎次郎訳『近世資本主義，第1巻第1冊』生活社，1942年。
岡崎次郎訳，上掲書，第1巻第2冊，1943年。

岡崎訳二冊で原著第1巻（1928年版，本文919ページ中）の，最初から620ページまで（第1巻のおよそ2/3）を訳出。訳出していない残余の部分を補う意味をもこめて，後に同上訳者は同上原著の319–919ページ分を，『ゾンバルト，近世資本主義の歴史的基礎』経済思想家選書，夏目書店，1948年，の形で要約している。

Zweiter Band, Das europäische Wirtschaftsleben im Zeitalter des Frühkapitalismus, vornehmlich im 16., 17. und 18. Jahrhundert, 2. Aufl., 1916.

Dritter Band, Das Wirtschaftsleben im Zeitalter des Hochkapitalismus, 1927.

梶山力訳『高度資本主義　1』有斐閣，1940年。

原著第3巻（同上原著，本文1,022ページ）の，最初から224ページまで（第3巻のおよそ1/5強）を訳出。

ちなみに，三巻六冊，本文3100ページほどのこの原著の，要約ないし抄録には，木村元一著・学生版『ゾンバルト「近代資本主義」』春秋社，1950年がある。

Die Zukunft des Kapitalismus, Berlin 1932.

鈴木晃訳『資本主義の将来』世界大思想全集　86，春秋社，1933年。

3.　経済学，社会学などに関する研究の系列

Ideale der Sozialpolitik, Archiv für soziale Gesetzgebung und Statistik, Band 10, 1897.

戸田武雄訳『社会政策の理想』有斐閣，1939年。

上掲ゾンバルト論文，1897年の直訳的邦訳書。

Technik und Wirtschaft, Jahrbuch der Gehe–Stiftung zu Dresden VII, 1901.

阿閉吉男訳『技術論』科学主義工業社，1941年。

上掲「技術と経済」1901年のほか，この訳書には，1910年のドイツ社会学会第1回大会での，「技術と文化」に関するゾンバルトの報告と，それをめぐる討論，その結果の改訂版ともいうべき1911年の

論文「技術と文化」in : Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, Band 33, 1911. および1935年の論文「技術の馴致(じゅん) Zähmung」が訳出されている。

Soziologie, bearbeitet unter Mitwirkung von Dr. H. L. Stoltenberg, 2. Aufl., Berlin 1923.
景山哲雄訳『社会学』而立社，1924年。
「序言」(原著12ページ分) のみゾンバルトのもの。

Die drei Nationalökonomien. Geschichte und System der Lehre von der Wirtschaft, München und Leipzig 1930.
小島昌太郎監修邦訳『三つの経済学』雄風館書房，1933年。

4. 20世紀ドイツ社会・経済学の三巨星の業績の邦訳書について

以上の三系列に亘るゾンバルトの研究分野における，学問的業績の邦訳文献表を通覧して明らかなことは，まず，多作家ともいえるほどの彼の多数の業績の内，ほんのわずかなものを除き，彼の主要著作，論文などの殆どすべてのものの邦訳が，少なくとも手がけられてはきたことであろう。

そしてその邦訳書は，既述のように，1910年代の大正初年頃から刊行されはじめ，20冊をこえる数の邦訳書となって，世に問われたのである。しかもその圧倒的大部分は，彼の生前 (1941年死去) ないし第2次大戦終了時 (1945年) までに，すでに公刊されているのである。

このことは，20世紀最高のドイツ経済・社会学者の一人であるゾンバルトにとっては，きわめて当然のことでもあろう。

この場合，私の思いうかべている他の20世紀最高のドイツ経済・社会学者は，社会・経済学者のマックス・ウェーバー Max Weber, 1864–1920, およびオーストリア学派第3世代の理論経済学者，ヨーゼフ・シュンペー

ター Joseph A. Schumpeter, 1883–1950 である。かれら二人の学問的業績も，ゾンバルトのケースと同じく，その主要なるものは殆どすべて，21世紀がはじまった今日までに，邦訳書として公刊されてきている，といえる状況にある。

しかも，かれら二人のケースで共通して特徴的なことは，20世紀後半に入ってからもなお，多くの有能な日本人研究者たちをえて，業績の邦訳が継続的におこなわれつつ，今日に至っている点である。

この特徴は，ゾンバルトより20年ほど生誕のおそい，1883年生れで20世紀半ばの1950年死去の，シュンペーターの業績の邦訳書に関しては，ある程度自然のことであるのかも知れない。しかし，1864年生れで，ゾンバルトの終生の戦友 Mitstreiter でもあった，マックス・ウェーバーの業績の邦訳に関していうならば，これは特別に特徴的なことであった。彼の業績は，彼の存命中（1920年没）には，わが国の学界では殆どとりあげられることもなく，またその邦訳書も公刊されていない状態であったからである[1)]。

これに反し，ゾンバルトのケースでは，既述のように邦訳の大部分は彼の死去の第2次大戦中頃までの，いわば20世紀前半にすでにおこなわれたものであった。だが今日までの所，彼の名を経済学史上に永遠にとどめしめるはずの最重要な業績である，畢生の大著『近代資本主義』三巻六冊は，20世紀前半に原著本文の1/4程度のもが，邦訳書として公刊されたままの状態にある。

20世紀ドイツ経済・社会学界の「三巨星」の邦訳書の運命の，以上のような相違は，また三人の学問的業績ないし学者としての性格と，その運

1) 私の知る限り，ウェーバーの業績の初期の邦訳書には，彼の講義ノートの整理をもとに編集された Wirtschaftsgeschichte von Max Weber, München und Leipzig 1923，の邦訳書，黒正巌訳『社会経済史原論』岩波書店，1927年，がある。また社会科学における価値判断排除の問題を含む，ウェーバーの社会科学方法論に関しての，井藤半彌著『財政学原理』巌松堂，1931年，165ページ以下の論述は，これに関するわが国でのきわめて初期の本格的紹介である。

命の相違の反映でもある，と見てよい側面もあるかも知れない。

1920年に死んだウェーバーは，その生存中はドイツにおいてさえも，彼の業績は断片的に，あちこちの学術刊行物などに公表されたままであり，彼の学説の全容とか，その偉大さとかを把握させにくいままの状態にあった。したがって，既述のように，この時代にウェーバーの邦訳書が公刊されなかったことは，当然のなりゆきでもあったといえよう。

ウェーバーの没後，彼の妻マリアンネ Marianne Weber, 1870–1953 を中心に，広範囲に亘る彼の業績や遺稿などを，宗教社会学，科学論，政治論など主要領域毎に整理し，論文集，その他の形での十冊前後の著作公刊に結実させた。おおよそ1920年代のことである。

その結果，マックス・ウェーバーの業績は，世界史的規模での比較という問題意識と，それにもとづく，たとえていえば，巨大聖堂の仰ぎ見るような壮大な列柱を思わせる，しかも永遠に未完成の構築物の姿を見せる，力強くかつ刺戟的なものとして，後の世代の多くの研究者の心を打つことになった。

そしてこれは，20世紀後半に入ると，一方では，ドイツ社会科学者たちを駆って，上述著作の改訂版を公刊させることになった。そしてついには，いわゆるマルクス＝エンゲルス全集に匹敵する数量の『マックス・ウェーバー全集』Max Weber Gesamtausgabe, Tübingen 1984－ が，公刊されはじめたのである。21世紀はじめの今日，すでに20冊ばかりの全集版が，私の手許にも届いている。

このようなドイツの状況が，他方，日本で20世紀後半に入っても，いなむしろ，20世紀後半になってからこそ，多くの有能な研究者たちを駆って，ウェーバーの業績の邦訳書の公刊へと走らせた，要因の一つともなったのであろう。

亡命教授としてアメリカに移住，彼の地で1950年に没したシュンペーターは，ボン時代に中山伊知郎，東畑精一，ハーバードでは都留重人とい

った，日本の経済学界の一時代を代表する門下生にめぐまれたことによって，かれらの指揮によって彼の主要諸業績の殆ど全部の邦訳，公刊に漕ぎつけることができたのであろう。

ナチ支配下の第2次世界大戦のさなか，1941年に没した，ウェーバーの生涯の「戦友」ではあったが，同時に一匹狼に終始し，若い研究者に冷やかでもあったゾンバルト。彼は均斉を保った，あたかも芸術観賞品のような，美しい完成された構築物としての，資本主義経済体制の発展史的諸業績を残した。そしてそれが，同時代の若い研究者梶山力や難波田春夫らの，ゾンバルトの業績の邦訳を促すことになった。しかし，第2次大戦後の日本の環境下では，これはもはや以前のような共感や刺戟をうまず，したがって，彼の原著に注目する若い研究者は急激に減少した。そしてそれが，ゾンバルトの，学史に永く残るべき不朽の業績たる『近代資本主義』の邦訳書の刊行が，尨大にすぎるなどのゆえをもって，未完成のままに打ち捨てられている，要因の一つにもなったのであろう。

もちろん，上述した日本におけるゾンバルトの業績の邦訳書公刊の状況は，彼の祖国ドイツにおけるその時々のゾンバルトの業績評価の反映，という側面をもつものでもあったのであろう。

第2次大戦後のドイツでも，かなり永い間ゾンバルトの業績には，社会科学者たちの関心が完全に向けられなかったようである。次いで東ドイツなどで，マルクス主義信奉者からその批判者，反対者，ファシストに転向したとする，ゾンバルトの時代迎合的態度への非難にもとづく，彼の業績批判の書物なども公刊されるようになった。また西ドイツでも，晩年のゾンバルトの，教授としての尊大な態度をあげつらう老教授もでて来ていた。

しかし，東西ドイツの再統一がはかられるようになった1990年頃に至って，20世紀のドイツ社会・経済学を総括する意味をもこめてであろうか。ゾンバルトの人と業績に再び光をあてようとする好著が，相次いで公刊されるようになって，今日に至っている[1)]。

もちろん，このゾンバルトの復位は，きわめて遠慮がちのものであり，いわば「非常におだやかなゾンバルト—ルネッサンス」[2] であった。これはそもそも，第2次大戦以降のドイツにおける，マックス・ウェーバーの社会・経済学説への関心と比肩できるほどの水準のもの，では到底なかったようである[3]。

以上のような，20世紀末におけるドイツの学界の情勢にも支援されてのことでもあろうか。近年に至りわが国でも，金森誠也教授がゾンバルト畢生の大著完成のための，準備的重要研究業績のすべて（上掲四業績）を，邦訳書として刊行された。これは永年の懸案である，ゾンバルトの主著

---

1) ここではドイツ語での関連著書三つをあげておくにとどめよう。
Michael Appel, Werner Sombart. Historiker und Theoretiker des modernen Kapitalismus, Marburg 1992, 339S.
Friedrich Lenger, 1957–, Werner Sombart, 1863–1941. Eine Biographie, München 1994, 570S.
Jürgen Backhaus, 1950–, hrsg. v., Werner Sombart (1863–1941)–Klassiker der Sozialwissenschaften. Eine kritische Bestandsaufnahme, Marburg 2000, 270S.

2) Wolfgang Drechsler, Zu Werner Sombarts Theorie der Soziologie und zur Betrachtung seiner Biographie, in : J. Backhaus, a. a. O., S. 83.

3) たとえば，ゾンバルトの発展史の方法論は，一定の経済志向を中心に，目的達成のための一定の技術，その適用の結果としての一定の組織とを，その内に含む経済体制概念を基軸とする。そしてそれは，歴史的にはあたかも生物の一生と同じような，幼・少年期，青・壮年期，老年期を経過する。しかも，この経済体制概念の内には，さまざまな要件をも取り入れうるものであった。これはある面では，マルクス亜流と考えられなくもない歴史派的総合とも，見られうるものでもあった。
しかるにウェーバーの歴史的社会学は，理想型 Idealtypus の形成と，これを方法的武器に，現実をそれとの適合性の程度の問題と見ることにしている。これによって，必然性といった，法則自体が力をもってこれを貫徹させるという考え方，ないしは因果決定論ともいうべき，マルクス主義的唯物史観を克服しうる鋭さをもつに至った点で，優越している。
このような方法論上の相違なども，ドイツの若い世代の社会科学者たちの，マックス・ウェーバー，ゾンバルト両者の業績への，反響の大きさの違いをうみだし，ひいてはゾンバルト—ルネッサンスの，おだやかさの一要因となったのかも知れない。
なお，F. Lenger, Marx, das Handwerk und die erste Auflage des Modernen Kapitalismus, in : J. Backhaus, a. a. O., S. 186 f. をも参照。

『近代資本主義』の邦訳完成のための，一つの重要な前進としても，大いに注目さるべきことでもあろう，とひそかに私は考えている[1)]。

第2節　1920年代のゾンバルトと日本の社会・経済学界

既述したゾンバルトの業績の邦訳書の紹介からも推察されるように，20世紀はじめから第1次世界大戦頃までにかけて，ゾンバルトはドイツ人経済学者中，わが国でその業績が最もよく知られ，かつ研究されていた進歩的有名教授であった。しかしながら，学問的意味でのゾンバルトと日本の社会・経済学界との接触が，直接的な形をとるようになったのは，私の知る限りでは，一応彼がベルリン商科大学から移って，アードルフ・ワーグナー Adolph Wagner, 1835–1917　の講座の後任として，ベルリン大学経済学正教授に就任した，1918年以降のことではなかろうか。

そこで私は，1920年代におけるゾンバルトと日本の社会・経済学界との直接的な接触を象徴する，三つのささやかなエピソードを，順次手短かに紹介することにしよう。そして，これだけで本稿を終らせていただきたい，と思っている。

1.　日本人ゾンバルト・ゼミナリストの誕生

つとにドイツのみならず，ヨーロッパ，いな世界的にも有名人気教授であったゾンバルトの，大学の講義には，それ以前より聴講したことのある日本人留学者もいたことではあろう。しかし遂に1922年には，ここベルリンでは，彼の研究指導を直接受けることになった日本人ゾンバルト・ゼミナリストの誕生，が見られたのだ[2)]。

1)　バックハウス編，前掲書，13ページ，および特に259ページにおけるバックハウスの論述をも参照。

2)　ゾンバルトの大学での講義への日本人出席者や，日本人ゾンバルト・ゼミナリステンに関しては，前掲，レンガー『ヴェルナー・ゾンバルト伝』1994年など，ドイツ側の資料からは，私は確かめることができなかった。それゆえここでの私の知識は，専ら日本側の資料からのものである。

その人の名は，後にわが国における西欧社会・経済思想史研究の第一人者となった，若き日の大塚金之助，1892–1977 であった。

彼はすでに，神戸高商の学生時代の 1913 年，折しも公刊されたばかりの，ゾンバルトの「近代資本主義発展史のための諸研究」という副題をもつ著作の第 1 巻，『奢侈と資本主義』1913 年，の抄訳的な紹介の前半部分を，『日本経済新誌』第 13 巻 5 号，1913 年 6 月に公表している[1)]。

次いで，東京商科大学専門部教授として在外研修中の大塚は，1920 年 5 月にはベルリン大学への通学をはじめた。そしてまず，ボルトキーヴィッツ Ladislaus von Bortkiewicz, 1968–1931 のゼミに参加，さらにゾンバルトの講義をきき，その魅力にとりつかれたことを告白している（前掲著作集，第 1 巻，375 ページ）。

こうして青年時代から，ゾンバルトの学風に強い関心をいだき続けていた大塚は，彼自身の述べる所によれば，ベルリン大学でゾンバルト教授の研究指導室の扉を敲くこと 2 年の後の 1922 年，漸くゾンバルトのゼミナリストたることをゆるされたのである。

当時の国際的にも有名な教授ゾンバルトのゼミには，入門希望者も多く，仲々入門が困難のようであった。したがって，ゼミナリステンの研究者としての資質も，相対的には非常に高かったようである。大塚の入門した時

---

1) 「近世資本主義発展史上の『奢侈』」〔纂訳〕，大塚金之助著作集，第 1 巻，岩波書店，1980 年，58–67 ページ。

ちなみに，大塚の掲載した翻訳部分は，章節からいえば，原著の

第 5 章 「奢侈からの資本主義の生誕」

Ⅰ. 正しい問題設定と誤れる問題設定

Ⅱ. 奢侈と商業

1 卸売商業

であり，量的には原著の 1 割弱の 20 ページ分（133–152 ページ）の，意訳的な抄訳といえるであろう。

ここでは，今日では使用しない奇妙な訳語がでてきたり，学者などの人名や地名などで，今日の慣例とはかなり異なった，日本語表記などにも出会うであろう。しかし 21 歳の若年にして，すでに原著の論旨を概ね違えることなく再現している点は，敬服に値しよう。

のゼミナリステンは全部で15名，内ドイツ人9名，ロシヤ人2名，ブルガリア人，ハンガリー人，インド人，日本人それぞれ1名，といった構成であった。また，ゼミナリステン中9名がすでにドクターであり，内ロシヤ人1名とブルガリア人1名の計2名は，大学教授でもあった。また，この時期のドイツを反映してか，この内には，労組からの派遣労働者，共産党員，革命家などもいたという（前掲著作集，第7巻，1980年，42ページ）。

二年待たされたとはいえ，このようなゾンバルトのゼミナールへの入門を，大塚がゆるされたのは，いかなる理由によるのであろうか。これについて大塚自身は，この時のゾンバルトの研究指導のテーマが「指導者」Führer であり，そのために「一人の日本人〔研究者〕が必要となったにすぎない」（前掲著作集，第6巻，1981年，43ページ），とのみ述べている。

「当時（1922年ごろ）のドイツ社会事情の学問的集中点のようであった」（前掲著作集，第6巻，45ページ），ゾンバルトのゼミナールでの研究指導の様相については，著作集での大塚の記述にまかせよう[1)]。

代ってここでは，あたかもこの時期の研究指導を契機とするかのような形で，ゼミ指導教授ゾンバルトとゼミナリスト大塚との，社会的，経済的な基本的関心ないし考え方が，それぞれ，共に180度転換したかに見える興味ある一事についてのみ，述べておきたい。

すなわち，一方では，いままで社会主義やマルクス主義的思想への，一定の理解者ないし共感者といった面を多くもっていた，ゾンバルトの社会・経済思想的関心は，おおよそこの時期を境に，基本的な方向転換をはじめたようにも見られる。すなわち，人間が本来もつはずの，全人間性にもとずく国民性，文化性といったものの重視の方向へ，換言すれば文化理想主義の立場を徹底させる方向へと，転換をはじめたようなのだ。この立場

1）「ゾムバートの研究指導室」前掲著作集，第1巻，423–434ページ。「ゾンバート教授のゼミナール」同，第6巻，42–45ページ。「ゾンバート教授はファッショ化する」同，第7巻，40–50ページ。「ベルリン大学の今昔—ワイマール憲法＝ナチーズム＝D. D. R.」同，第8巻，1981年，86–92ページ。

から，ゾンバルトは資本主義のうみだした文化にも，またそれが資本主義と同じ価値観に立つがゆえに，これを克服しようと志す，マルクス主義のうみだすであろう文化にも，明瞭に否定的な見方をはじめるようになったのである。

しかるに他方，大塚はこの時期を契機に，マルクス主義や社会主義の思想や，これにもとずく改革・革命路線に，大いに親しみを覚え，かなり明瞭に共感する自分を，自覚しはじめてきたようなのだ。

同じゼミの指導教授とゼミナリスト。この両者が時期をほぼ同じくしての，それぞれの基本的関心ないし立場の，180度の方向転換の兆し。両者の方向転換は，両者それぞれにとっては，いわば内的必然性をもってのことではあろう。しかし，両者の方向転換が時期を同じくして兆した点では，これは多分に偶然のことであったのかも知れない。

ゼミナリスト大塚に即して考えるならば，強いていえば，ゾンバルトの思想的方向転換への苦悩を，反動化，ファッショ化の方向で捉えようとしたかに見える大塚には，ゾンバルトの研究指導は，彼の思想的方向転換になにがしかの影響をあたえた，と考えてもよいであろう。しかし，やや尊大な一匹狼で，若い研究者たちの業績を，冷やかに酷評しがちな研究指導教授ゾンバルト[1]の，ゼミナールでの大塚への思想的影響は，さして強くはなかったであろうと推測されよう。いずれにしても，両者のほぼ同時期の，互いに反対方向への思想的方向転換の事実そのものは，甚だ興味ある事実であることには変りはないであろう。

2. ゾンバルトの日本人留学者への個人教授

自らのゼミナリストとする以外の，若い日本人社会・経済学者とゾンバ

1) Günter Schmölders, Berliner Konjunkturtheorie und –politik vor Keynes, in : Beiträge zur Wirtschaftswissenschaft in Berlin. Geschichte und Gegenwart, hrsg. v. Burkhard Strümpel, Berlin 1990, S. 112.

ルトとの直接的接触の，もう一つの可能な形には，日本人留学者にたいするゾンバルトの個人教授 Privatstunde があろう。

誇り高きベルリン大学の経済学正教授であったゾンバルトが，いわば大学生の家庭教師のアルバイトのような個人教授をすることは，通常では考えられないことである。しかし，第1次世界大戦に敗れ，破局的インフレーションにも見舞われた1920年代，特にその前半の時期の，ドイツの政治的・社会的・経済的大混乱下においては，これはありえたことかも知れないのだ。大学教授のような階層にとって，この大混乱は，かれらに歴史上類を見ないほどの，生活上の苦難を強いることになったからである。ゾンバルトの場合には，これは日本人留学者を対象に，現実的にもおこったことであった。

そこでまず，現在ギーセンの近世史の教授レンガーの，570ページにも及ぶ綿密な伝記的研究，前掲『ヴェルナー・ゾンバルト伝』1994年にもとずいて，事実の経過を説明をしておこう。

「1923年はじめ，ゾンバルトは〔当時の安定通貨たる〕米ドルを手に入れるために，一人の日本人希望者に個人授業 Privatunterricht をおこなった」(レンガー，前掲書，259ページ)。その日本人とは，50レッスン150米ドルという条件を提示した，長崎高商教授の留学者 M. Baba〔馬場誠，1893—1967年〕であった（同，266ページ)[1]。

1) ゾンバルトの日本人の個人教授に関する事項について，残念ながら私には，これの詳細を確かめるべき日本人側からの直接的手だては，もち合わせてはいなかった。
それゆえ私は，まずレンガーの叙述に即してその経過の概要を示し，これと日本人受講者が，彼の親族ないし知友に語った事柄の内容と経過とが，合致するか否かを確かめることにした。
人々の厚意により，幸い当時の受講者馬場誠の親族（受講者の次男で長崎在住の馬場暁氏）を探すことができた。その結果，同氏の口から，レンガーの叙述が受講者である彼の父から聞いた事実経過とも合致する，との証言をえた。
ちなみに，私の記憶に誤りなければ，半世紀近い以前に，横浜市大教授前田幸太郎より，彼もベルリン留学時代，月謝を支払って，ドイツ社会民主党 SPD

では，ベルリン大学経済学正教授のゾンバルトが，日本人留学者への個人教授をおこなうに至った主たる理由は，いずこに存したのであろうか。

日本人としては，彼のエキゾチズムからする日本人びいきなども，その一理由であってほしい，と思いたい所ではあろう。しかしこの理由は，ゾンバルトにあっては，殆ど考えられないことでもあろう。

レンガーは，「彼の戦時講演」と断りつつも，ゾンバルトの日本人観を表現するものとして，彼の次のような日本人を侮る言葉を再現している。「大学教師として非常にひんぱんに，かかわり合わざるをえなかった日本人たちを，私は〔第1次世界〕大戦以前，すでに要するに決して人間だと考えなかった」[1]，と。

しかしながら，戦時下でのかかる表現をもって，ゾンバルトが本質的に反日本人的であるとまでは，いえないであろう。この表現はレンガーのいう以上に明瞭に，戦争勃発初期の特異な状況下での，ゾンバルトの日本人観を表現するもの，と割引いて考えるのが自然なのではなかろうか[2]。

の党員で，ベルリンの経済史教授でもあったクノー Heinrich Cunow, 1862–1936 の，個人教授を受けた旨聞いたこともあった。この時期には，ベルリンの看板教授ゾンバルトの個人教授といえども，大いにありえた状況下にあったのかも知れない。

1) レンガー，前掲書，266 ページ。

これはわが国の対独宣戦布告後二ケ月あまりの，1914 年 11 月 3 日付の新聞 Neues Wiener Tagblatt（夕刊）での，ゾンバルトの論説「われらが仇敵たち」Unsre Feinde からの引用である。

目下ウィーンに留学中の東京国際大学川村よし子教授の好意で，私はこの新聞のコピーを見ることができた。

これによると，ゾンバルトのこの新聞論説は，それ以前に新聞 Berliner Tageblatt（日付不詳）に掲載されたゾンバルトの論説を，編集者が適宜その枢要箇所を使いつつ，まとめたものである由である

2) そもそも「誇張ずきの性癖」(Alfons Dopsch, 1868–1953, Wirtschaftliche und soziale Grundlagen der europäischen Kulturentwicklung, aus der Zeit von Caesar bis auf Karl den Großen, II. Teil, 2. Aufl., Wien 1924, S. 467) とまでいわれることもある，ゾンバルトにおけるこれら表現の戦時的特殊限定的性格は，ほぼ時を同じくして「愛国心」から執筆された，彼の『商人と英雄』1915 年 Händler und Helden. Patriotische Besinnungen, München und Leipzig 1915. における，「イギリス人的商人性」englisches Händlertum の視点からのイギリス人観にも妥当するであろう。

以上述べた所から総合的に判断するに，ゾンバルトは，西ヨーロッパを中心的主役として世界の歴史を考察する人として，日本人ないし日本の若い研究者を，他の欧米諸国中の中小の国々の人々についてのケースに準じて，ないしは一新興国の人といった感じで，それより若干強く，やや見下した感じで見ていた人物，と考えるのが自然であるのかも知れない。

となると，彼が日本人留学者に個人教授をおこなった，ないしはおこなわざるをえなかった，主たる理由は，結局，第1次大戦後の，彼個人ないし彼の属する階層の生活環境の大変化が，それをなさざるをえない所にまで，彼を追いやってしまった点に，求めざるをえなくなるであろう。

第2次大戦中からその敗戦後にかけて，日本人の多くが経験したのと同じように，あるいはそれ以上に強い程度で，第1次大戦中およびその敗戦後の当分の間，ドイツでもまず基本的食糧の入手難が生じていた。また人々は，生活のための衣料・居住条件の悪化に，その上インフレの昂進になやむことにもなる。

戦後インフレの継続は，ゾンバルトのような，いわゆる精神労働者 der geistige Arbeiter 層への，給与の是正的引上げ措置の遅れと不充分さや，物価上昇率とくらべて，相対的に増額の小さくなった，印税や講演料収入といった事情なども加わって，かれら階層の絶対的また（筋肉労働者層とくらべての）相対的生活困窮度を，非常に高めることになってしまった。そして大学教授といった身分の人々の生活条件は，戦前では想像もつかないほどの，低いみじめなものとなってしまったのだ。

この間ゾンバルト家は，四人の娘の嫁入りのための巨額な出費が続き，また1920年12月には，妻の突然の死という不幸にも見舞われた（レンガー，前掲書，258ページ）。

もちろん，このゾンバルトの日本人観は，この論説では，日本は論及しなくてもよい程度の小敵国群の一つ，としてとりあげられているにすぎないので，このような形で簡単に片づけられてしまったのではなかろうか，とも考えられよう。

そしてこの通貨，物価，為替相場のインフレ傾向は，敗戦国ドイツの超巨額の賠償義務などとのからみもあって，その後一層の加速を示す。そしてこれは，1923年後半には悪性インフレないし破局的インフレーションとなって，ドイツ国民の生活を一層の混乱と困難に，おとし入れることになるのである。

そしてこの時，換言すれば1923年のはじめ，安定通貨米ドルで月謝を支払うという条件での，日本人留学者の個人教授希望の出現は，時のベルリン大学正教授のゾンバルトにとってさえ，少なくとも断る必要のないもの，ないしは渡りに舟の申し出，に思えたのかも知れないであろう。

ベルリン大学経済学正教授のゾンバルトをめぐる，第1次大戦後のこのような生活困窮状況，特に戦前の大学教授身分の人々の生活状況とくらべての，絶望的な生活水準低下の現実。これはさらに彼をして，遂に日本への自己の蔵書一括売却へ，と進ましめる要因となってしまったのではなかろうか。

3. ゾンバルトの蔵書の日本の大学への売却

第1次大戦後のインフレ期を通じての，自らの研究活動の栄養源でもあった蔵書の売却の頻発をもって，ドイツの大学教授層の極度の経済的困窮の証明であるとするのは，きわめて自然のことであろう。まして現役として活躍中の研究者が，身を切られる思いをして自らこれをなさざるをえなくなったことは，よほどの生活困窮の緊急事態，と考えねばならないであろう。

すでに若干の書籍などの，古書店への売却をおこなっていたゾンバルトにも，1923年夏には，新たに自己の蔵書の日本への一括売却問題が生じたのである（レンガー，前掲書，266ページ以下）。そしてこれは，紆余曲折はあったであろうが，結局1929年（昭和4年），当時の大阪商科大学が140,307マルク（邦貨73,705円23銭）を支払って，『ゾンバルト文庫』と

して，大学図書館の蔵書に加える形で結着した[1)]。

その『文庫目録』の記述からも明らかのように，一応11,574冊にものぼるゾンバルト文庫は，ゾンバルトの比較的若い頃の収集にかかる，「経済学および社会主義に関するもの」から成り立っている。そして同蔵書の概要については，大阪市大教授小谷義次の簡潔にして，かつ学問的に公平な紹介がある（「ゾンバルト文庫について」同文庫目録所収）。それゆえここでは，再述しないことにしよう[2)]。

---

1) ゾンバルトの自らの蔵書の，大阪商大への流出にかかわる事項の調査については，大阪市立大学経済学部出身の安田保氏（三菱商事）の協力による所大であったことを，ここで改めて述べておきたい。

なお，大阪市立大学付属図書館所蔵『ヴェルナー・ゾンバルト文庫目録』ゾンバルト文庫目録刊行会編，日本評論社，1967年，序，参照。

ヴェルナー・ゾンバルトの再婚後の長子であり，在野のドイツ文化社会学者ともいうべきニコラウス Nicolaus Sombart, 1923– もいうように，ゾンバルト家の側から見れば，「もし蔵書が大阪に流れ着く幸運な偶然がなかったならば，蔵書は今日，烏有に帰してしまっていたであろう」（前掲文庫目録，ix ページ），といって自らを慰めることしかできないであろ。

2) たとえば，ゾンバルトの前掲著作『奢侈と資本主義』1913年の第5章第1節では，彼は18世紀の英，仏，独などで有名となった奢侈的需要の資本主義経済体制創出への，促進的作用の面から奢侈を擁護する，いくつかの「奢侈論」を紹介している。この場合，ゾンバルトはこれに関する8名の議論の内，3名（仏：アベ・コワイエ Gabriel François Coyer, 英：ダニエル・デフォー Daniel Defoe, 1660–1731, 独：W. F. v. シュレーダー Wilhelm Freyherr von Schrödern, 1640–1688）の見解については，直接ゾンバルト文庫所蔵の当該原典にもとづいて，紹介したのである。

ただし，これらの内，前期官房学者シュレーダーの見解は，ゾンバルト文庫所蔵のシュレーダーの主著の1744年版 Fürstliche Schatz- und Rentkammer, ..., Leipzig und Königsberg 1744. によって紹介されている。しかし，この著作の初版は，すでに17世紀の1686年に公刊されている点に注意されたい。類似の状況は，たとえば『近代資本主義』第2版にも見られる。この著作の第1巻，1916年，368ページでは，重商主義学説における貴金属生産重視を説明するために，前期官房学者ホルニク Philipp Wilhelm von Hornigk, 1640–1714 の主著から引用されているが，これもその初版，1684年からではなく，ゾンバルト文庫所蔵の1727年版 Oesterreich über alles, wann es nur will, ..., Regenspurg 1727. によっているのである。

このこと，およびその他の状況を併せ考えると，ゾンバルトの尨大な書籍の収集は，いわゆる愛書家的収集ではなく，いずれかといえば，主として彼自身の研究テーマ解明の必要に促された結果の資料収集，のように私はひそかに考えている。